

常龍山大神宮
天照御祖神社



古くからこの地方の開発鎮護の総守護神としてあがめられている。鎮座する常龍山は、太古より神々の鎮まり巫す丘、御山と尊ばれ、山上の古大木跡は神々の憑依する神籬、神霊のやどるしるし勧請木で、その周辺も含めた特別な祈願を籠めた祭場であった。太古神殿ではなく、神籬としての大木と磐座に神々を祭った古代祭祀形態の信仰であった。

常龍山碑によると今から1200年余前に征夷大将軍坂上田村麻呂が蝦夷軍の総帥大襲王[タモノキミ]を滅ぼし、その残党である常龍鬼(鬼とは大和軍が敵対する強い大将に名付けた言葉で常龍鬼とは真の蝦夷の大将であった)を唐丹の村で討したのだった。

ところがこの霊は怨霊[おんりょう]として荒びた為、この霊を慰めしずめることを祈って、山上の一角に十一面観音像を安置した小さな堂を建立し、それまで祀ってきた天照大御神をはじめ天神地祇[あまつかみくにつかみ]と共に合せ祀るようになった。

この堂建立により神仏習合の信仰となり、神社付属の別当寺として常龍山光学寺の成立も、のちにあったが、その後星霜を経て寺は荒廃した。

社の祭祀家として続いた河東家の修験覚善院は、江戸初期社殿を造営。1618年には山下の常龍山宮拜所を兼ねる岩ノ沢神社(通称岩乃沢権現)の獅子頭が常龍山に移管奉納され、山上に移し安置されて常龍山大権現と尊ばれ権現神楽が舞われるようになった。また太古より神々の光飛来臨の伝統は寛文の頃も続き、南部領平田村の新山権現の神が国境を越えて再三飛来したと縁起にある。

文化年中葛西昌丕[まさひろ]は二十四人とはかり境内を広め神殿拜殿等を造営、更に、河東[かとう]大覚院[だいがくいん]が本郷の村上音吉外七人と共に伊勢神宮に詣り神祇官に請うて神霊を受け神々の御分霊を奉遷した。

1869年、政府は神仏混淆を禁じ、十一面観音像は本郷の福寿庵に移し祀った。かつ修験を廃し、純神道とし社号を天照御祖神社とし、1872年村社となった。

釜石さくら祭りとは

正式には唐丹町常龍山鎮座天照御祖神社の「式年大祭御神輿渡御式」という名称であり、桜の咲く時期に行なわれるので、さくら祭りとも称され、昔から地元の人々から親しまれながらも、大切に受け継がれてきた由緒あるお祭りです。

式年大祭は天照御祖神社のもっとも大きな祭りであり、3年に1度行なわれ、天照御祖神社より御霊代を御神輿に奉遷して、唐丹町本郷の御旅所へ御巡幸奉る行事で、神様が氏子の生活や家々を視察するお祭りです。「式年」とは3年に1度の神輿渡御式の「式」を執行する『定め年』を意味します。

この祭りには御旅所地の本郷地区鎮守大杉神社と途中の小白浜地区鎮守西宮神社の二社の神輿が前日の宵宮祭りより御迎えに常龍山に行き、当日は総鎮守天照御祖神社御神輿を小白浜、本郷地区にご案内しながら御通り、御旅所に奉遷します。また氏子崇敬者は、警備の為侍姿をしてお供したり、神々を楽しませるために神楽・手踊りをしながら供奉します。

渡御式の行列は、江戸時代の大名行列形式(参勤交代の行列形式)をとることで有名で、氏子は侍姿や奴姿でお供をします。これは氏子崇敬者が天照御祖神社を崇敬するあまりその神輿の渡御式に権威を付け、また神輿に無礼な行ないをさせない為に、刀・鉄砲・槍・弓等を持ち警固しながらお供した事により始まりました。これは江戸時代唐丹の庶民階級には届かない華麗な大名行列に魅せられ、当時唐丹の本郷に駐屯していた伊達藩士より竹刀や棒切れ、竹棹等を利用して行列の仕方を教えられて渡御式に取り入れました。また、神々を楽しませるため、神楽や虎舞、手踊り、太鼓が行列に加わります。大名行列の仕方は、江戸時代に本郷の番所に駐屯していた伊達藩士から教えられ、渡御式に取り入れてきたといわれており、300年以上の歴史をもち、行列の役割、持ち物などは各地区で代々受け継がれてきています。今回の行列は、神社を出発し小白浜を通り、桜並木を抜けて御旅所(本郷海岸)までの4kmを練り歩きます。



お問い合わせ先

唐丹地域会議(唐丹地区生活応援センター内)

〒026-0121 釜石市唐丹町字小白浜50番地 電話:0193-55-2111 Fax:0193-55-2112

唐丹町facebook <https://www.facebook.com/tonicho.sakura>

釜石さくら祭り

唐丹町常龍山鎮座天照御祖神社
[式年大祭御神輿渡御式]

2024年4月28日 [日]

雨天の際は、延期になる場合があります。

行列出発 9:45(予定)

